

〔資料紹介〕 東京文化財研究所所蔵ニットー長時間レコード

飯 島 満

一 はじめに

東京文化財研究所無形文化遺産部に所蔵されている戦前のレコードの中には、通常のレコードプレーヤーでは再生できないものがある。パテ社の縦振動レコード、日東蓄音器株式会社（ニットー）の長時間レコード、日本フィルモン社のフィルモン音帯の三種類である。

縦振動レコードとフィルモン音帯については、それぞれ調査内容の一部を報告してきている（「特殊再生装置を要する音盤」パテ縦振動レコード』『無形文化遺産研究報告 6』平成二十四年三月・「フィルモン音帯に関する調査報告」『無形文化遺産研究報告 5』平成二十三年三月）。本稿では大正末から昭和の初めにかけて発売されていたニットーの長時間レコードを取り上げることにする。

二 ニットー長時間レコードの概要

戦前、一般的に流通していた平円盤七八回転レコードの収録時間は、一〇インチ盤が片面で三分前後、一二インチ盤が四分半前後であった。レコード片面では収まらない演目は、分割して録音作業を行わざるをえない。そのため、レコードの収録時間を延ばす様々な工夫（発明）がなされること

となった。ニットーが大正十五年（一九二六）十一月に発売した長時間レコードは、一二インチ盤で片面一〇分以上の録音が可能であった。

ニットー長時間レコードは、それまでのレコードとは異なる規格で製作されている。通常のレコードが角速度一定であったのに対し、ニットー長時間レコードは線速度一定であった。

平円盤レコードは、回転する平円盤の音溝からレコード針が振動を受け、そこから再生音を得ている。音溝は外側から内側に向かって切つてあることが多い。一般のレコードプレーヤーは一定の回転数で回るように設計されている。ターンテーブルの回転速度が一であるとき、音溝を進むレコード針の速度は次第に遅くなっている。例えば、三〇センチレコードの外側の円周は、円周率を三とすれば九〇センチ、最も内側の音溝が中心から五センチ辺にあつたとすれば一〇センチ、その円周は三〇センチとなる。同一時間内でレコード針が進む距離は三倍になってしまう。ターンテーブルの回転数が変化しないということは、レコード針が音溝を進む速度に関して、再生の当初（外側）が最も速く、内側に進むにつれて漸減する。これが角速度一定で作製されたレコードの特性ということになる。平円盤レコードの場合、線速度一定より角速度一定の方が遥かに技術的に容易である。ただし、再生音の音質は、レコード針の進行速度がより遅い内側が、外側に比べて劣つたものとなつてしまう。

ニットーの長時間レコードは、回転数を次第に変化させる（より速くする）

ことで、レコード針の進行速度を一定に保持し（線速度一定または等線速度）、長時間の収録を可能にしていた。再生音の初めと終わりで音質が次第に劣化してゆくのを抑える効果も期待できる。当時としては画期的な発明品であった。ところが、昭和三年（一九二八）一月を最後に、新譜は発売されなくなってしまうという。営業的には失敗した製品だったことになる。

音盤が線速度一定で製作されていたため、ニットー長時間レコードの再生には、専用の速度調節器または専用の蓄音器が必要であった。言うまでもなく、そうした再生装置もニットーが生産販売していた。ところが、数年で姿を消した製品であったため、完品で現存する速度調節器あるいは動態保存されている専用再生機は、今のところその存在を確認できていない。少なくとも、収蔵する公的機関はないようである。勿論、これまでに線速度一定で回転を制御できるアナログレコードのターンテーブルは商品化されている（ちなみにCDの回転は線速度制御）。専用再生機が入手できないニットー長時間レコードは、きわめて厄介な音声媒体なのである。

ニットー長時間レコードに関しては、歴史的な事実関係も含め、大西秀紀「長時間レコードの復元再生について」がほとんど唯一の基礎文献である。CD三枚組の『復元 幻の「長時間レコード」山城少掾 大正・昭和の音楽を聞く』紀伊國屋書店（二〇〇六年）の解説書に収録されたものである。本稿は、この文献から数多くの情報を得ている。

このCD集には、豊竹山城少掾少掾（一八七八—一九六七 録音当時は二世豊竹古鞆太夫）と四世鶴沢清六（一八八九—一九六〇）による義太夫節浄瑠璃三演目が収められている。ニットー長時間レコードに吹き込まれていた演奏——各演目ともレコード四枚組なので合計するとレコード二二枚分——で、CDタイトルに「復元」とあるように、音声データをデジタル処理により復元したものである。

等速で回転する音盤上でレコード針が進む速度は、その時点での音盤の直径から算出できる。回転数を一定にしたまま、つまり通常のレコードのように角速度一定で再生収録したデジタル音声に対して、次第に遅くなるレコード針の速度変化に同期させ、ピッチを漸次上げて行くような処理を行うことができれば、理屈の上では線速度一定で再生したものと等価の音声データが得られる。ただし、技術的に可能であっても、実現は容易なことでない。その困難で手のかかる復元作業に携わったのが大西秀紀氏である。

デジタル編集による復元作業の実際については、前出「長時間レコードの復元再生について」で詳細に報告されている。ただ単に作業手順の解説にとどまらず、収録再生のメカニズムについても、その解説は委曲を尽くしている。さらに「ニットーの録音・再生メカニズムが一応は線速度一定的ではあっても、厳密にはそのように動作していなかった」のではないかとといった新たな知見も含まれている。日本の録音文化史という側面からも、非常に重要な文献である。

三 東京文化財研究所所蔵のニットー長時間レコード

東京文化財研究所無形文化遺産部（旧芸能部）が所蔵しているニットー長時間レコードは、一三タイトル（二枚組・三枚組各一）一六枚である。

東京国立文化財研究所編『音盤目録』は、SPの収集家として知られていた安原仙蔵（一九〇三—一九五五）の旧蔵レコード（一九六一年に当時の東京国立文化財研究所芸能部へ譲渡）を整理したものである。長時間レコードは、その収録内容によって『音盤目録Ⅲ』と『音盤目録Ⅳ』に分けて掲載されている。そのため、所蔵の全体像が必ずしも明瞭ではなかった。ここで改めて所蔵一覧を掲載する所以である。

東京文化財研究所蔵「ニットー長時間レコード」

種目	演者	演題	レコード番号	表示演奏時間	発売年月日
長唄	杵屋登美	秋の色種〔秋の色種〕	L3-A/L3-B L4-A/L4-B	**1分〇八秒/B面判読不能 **1分四〇秒/B面判読不能	大正15年11月 大正15年11月
長唄	杵屋登美	供奴〔供奴〕	L15-A/L15-B	1分二〇三秒/1分五〇秒	大正15年12月
落語	初代桂春団治	らくだ〔らくだ〕	L16-A/L16-B	1分二八秒/1分三五秒	大正15年12月
講談	大島伯鶴	寛永三馬術 出世の春駒 〔曲垣平九郎 出世の春駒〕	L17-A/L17-B L18-A/L18-B L19-A/L19-B	九分〇〇秒/1分一五秒 1分〇八秒/1分一五秒 九分五五秒/九分五〇秒	大正15年12月 大正15年12月 昭和2年1月
落語	初代桂春団治	足上がり〔足あがり〕	L43-A/L43-B	九分〇五秒/九分〇五秒	昭和2年6月
長唄	四代目芳村伊四郎	多摩川〔多摩川〕	L49-A/L49-B	九分二八秒/九分二七秒	昭和2年6月
清元	清元巴栄太夫	お半〔お半〕	L54-A/L54-B	九分〇〇秒/八分二二秒	昭和2年9月
落語	五代目笑福亭松鶴	宿屋仇〔宿屋の仇討〕	L60-A/L60-B	九分〇三秒/九分一三秒	昭和2年9月
落語	二代目立花屋花橘	辻占茶屋〔辻占茶屋〕	L61-A/L61-B	七分五〇秒/九分三五秒	昭和2年9月
落語	初代桂春団治	宿替え〔宿替〕	L63-A/L63-B	九分三五秒/九分三四秒	昭和2年9月
箏曲長唄	立花家美之助	吾妻八景〔吾妻八景〕	L65-A/L65-B	八分三〇秒/八分五五秒	昭和2年9月
落語	初代桂春団治	延陽伯〔円陽伯〕	L74-A/L74-B	九分〇〇秒/九分〇〇秒	昭和2年12月
落語	五代目笑福亭松鶴	高津の富〔高津の富籤〕	L82-A/L82-B	九分三四秒/1分四九秒	昭和3年1月

* L19-A/L19-Bのレール表記は「大島伯鶴」

** レールに演奏時間不表示

一覧の「表示演奏時間」とは、レコードレーベルに記されているものである。大西氏は「録音時にストップウォッチで実測した時間と考えられ、再生速度の目安とするものであろう」と推測している。

ニットー長時間レコードは、七七種が発売されていたという。東文研の所蔵数、一三タイトル一六枚は必ずしも多いとはいえないかもしれない。しかし、新譜の発売期間は大正十五年（一九二六）十一月から昭和三年（一九二八）一月のわずか一年と数か月であった。極めて短期間で消えてしまった製品である上に、通常の蓄音器ではうまく再生できなかったことも災いして、残されたレコードの数そのものが少ない（昭和館でも収蔵は三枚）。七七種の全てが現存しているのかも定かではない。今後の調査の進展に期すことにしたい。

ところで、レコードの価値は、骨董的な稀少性だけではかるべきものではない。いうまでもないことである。より重要なのは録音の内容である。豊竹山城少掾と四代目清六の義太夫節浄瑠璃がCD化されたのも、以前から注目されていた演奏だったからに他ならない。無形文化遺産部では、所蔵レコードの中から、まずは落語を中心に復元再生を大西秀紀氏に依頼し、実際の収録内容を検討することとした。初代桂春団治（一八七八―一九三四）、二代目立花家花橋（一八八四―一九五二）、五代目笑福亭松鶴（一八八四―一九五〇）録音当時は三代目笑福亭枝鶴」という大正から昭和にかけて活躍した大阪落語を代表する噺家による口演記録だったからである。

ニットー長時間レコードが制作販売されていた大正末から昭和初期は、年代的にアコースティック録音（旧吹込み）の時代である。ライブ収録された落語ではないことは、あえて断るまでもないだろう。大衆演芸である落語では、客入れをしていないスタジオ収録は、おしなべて評価が低い。盛り上がり欠ける口演になってしまいがちだからであろう。ところが、

復元再生した落語は、どれもが十分に満足できる出来栄であった。落語として、いまでも通用するような口演だったということである。SPレコード片面の平均的な収録時間は三分前後、ニットー長時間レコードはその三倍であった。最長で一〇分以上、腰を折られることなく録音できることが、落語の吹込みでは良好な結果を生み出すことに繋がったといえるのだろう。本稿で紹介するのは、次の三枚である。レコード番号の続く亀甲括弧【】内の番号は、本研究所の整理番号である。

1 初代桂春団治『足あがり』

L 43【一八一一】九分〇二秒・九分〇六秒
初代春団治の『足上り』はこのレコードが唯一の音源となる。『足上り』は芝居噺で、現行では歌舞伎『四谷怪談』が使われている。このレコードでは別の狂言、小平太の幽霊が出る芝居となっている。寡聞にして、人名の一致する歌舞伎狂言を知らない。ただ、この噺では登場人物の一人（年増の芸子）が「弁天座で高嶋屋が芝居してまんね」と言っており、番頭一行はその観劇に出かける設定になっている。高嶋屋とは年代的に二代目市川右団治（一八八一―一九三六）明治四十二年に二代目を襲名）であろう。二代目右団治は大正十二年八月弁天座『小幡小平治』に出演している（『近代歌舞伎年表 大阪篇』第七巻）。

春団治の『足上り』は、この芝居を念頭に置いて演出されたものと考えられる。

2 二代目立花家花橋『辻占茶屋』

L 61【一八一―四】七分五〇秒・九分四〇秒
二代目花橋が吹き込んだ『辻占茶屋』は、他にニッポノホン『辻占』一枚、ニットー『恋の辻占』三枚がある（いずれも東京文化財研究所に所蔵）。な

お『恋の辻占』のレーベルには「鴻池家御依囀」とあることから私家盤であり、市販されてはいなかったものと考えられている。

花橋の『辻占茶屋』は前半部分のみの録音である。お囃子（音曲）との掛合いになる部分を収録したということであって、サゲも付けられており、成り行き任せの時間切れといったような不完全な録音ということではない。なお『恋の辻占』三枚の収録箇所も、本レコードとほぼ同じである。

3 五代目笑福亭松鶴『高津の富籤』

L 81（一八一—一三） 九分四二秒・一〇分五三秒

五代目松鶴の『高津の富』は、本レコードが唯一の音源となるようである。残念ながら『高津の富』も完演ではない。あと一分もあれば、サゲまで収録できたのではなからうか。両面ともニットー長時間レコードの上限に近い収録時間となっている。致し方がなかったであろう。とはいえ『辻占茶屋』と同様、決して不完全な記録という訳ではない。最後まで余裕を感じさせる口演であり、三〇分前後はかかる演目ながら、オチが異なっている以外は、約二〇分で見事にまとめ上げている。レコード収録に際して万全の準備を整えていたのであることがわける。

『高津の富』は五代目松鶴の得意としていた演目の一つであったという。これまで速記でしか残されていなかった『高津の富』が、ほぼ完演に近い形で聴ける状態になった意義は大きいように思われる。

ところで、音声記録して優れた内容であることを、文字情報で伝えるのは容易なことではない。長時間レコードから文字起しした落語三席を、参考資料として掲げておく。これだけの文字情報が滞りなく戦前のレコード一枚に込められていたということは、口演の好調さを反映するものといえるのではないだろうか。

今年度、無形文化遺産部が主催した公開学術講座『昭和初期上方落語の

口演記録』（平成二十五年十月五日・東京国立博物館平成館大講堂）では、これまで全くと聞いていい程に聞かれることがなかったであろうニットー長時間レコードを題材に取り上げ、可能な限り多くの時間を割いて、落語の口演記録を聞いていただく企画を立てた。発明品として画期的だったばかりでなく、上方落語の分野においても極めて優れた録音成果を残したレコードであったことを、収録内容ともども多くの方に知っていただきたかったからである。

この参考資料は、公開学術講座の配布資料に一部訂正を加えたものである。遺憾ながら聞き取れない箇所については、ブランクとなっている。ニットー長時間レコードの収録内容については、これから順次、紹介してゆく予定である。

文字起しに際しては、次の方々にご助力を賜りました。

記してお礼申し上げます。

大西秀紀 岡田則夫 中川桂

《参考文献》

大西秀紀「長時間レコードの復元再生について」

『復元幻の「長時間レコード」』山城少掾 大正・昭和の文楽を聞く

紀伊國屋書店（二〇〇六）解説書所収

小佐田定雄「上方落語 はめものきっかけ帳」

足上がり『芸能懇話』第二号（一九九〇・一）

辻占茶屋『芸能懇話』第八号（一九九四・七）

露の五郎編『五代目笑福亭松鶴集』青蛙房（一九七二）

豊田善敬編『桂春団治 はなしの世界』東方出版（一九九六）

都家歌六『落語レコード八十年史』国書刊行会（一九八七）

林家染丸『上方落語 寄席囃子の世界』創元社（二〇一二）

参考資料 1

『足あがり』 桂春団治

ニッソーレコード L 43

(前囃子)

— エー相変わりませず、お笑いぐさ一席申し上げます。色町のお噂がどうもいよいよ心得ておりますねが。いくつ何十になりまして、お茶屋ちゅうもんは具合のええもんで、あらあハマラメの里とか申しまして、何じゃこう、齒で美味しいもんを味おうて、目でええ事を見まして、耳でええ事を聞く。あらもうし、お茶屋ちゅうもんは具合のええもんで、あんまり行くなり、いやな事言いませんけど、お茶屋もお金を使わんちゅうと、なんじゃこう火箸の内でこう、二階へ上げてくれません。

「今日は人がつかえておりまんね、また出直しておくんははれ」
あいつは具合悪うおますけど、お金さえ使^{つか}うてるちゅうと、色町ちゅうのは具合のええもんで、何言うたかて、イヤとは言いません。
「姉貴、ちよっとすまんけど、ちよっとなんじゃで、小鉢もんか何ぞで一つ、もう一つ食わしてほしんや、今日は。腹がなごむねやさか
ら」

「ハア、ええでえ」
てなもんで。

「女子呼びにやってや」

「ハア、ええでえ」

何でも「ハア、ええでえ」。イヤとは言いません。あれも段々と越え

てきまするちゅうと、もうあんた、

「お茶屋で一杯」「そんなんおもしろない」

「今日はどないしよう」「今日はどこそこへ行くう」

「須磨がよかろう」「いや舞子がよかろう」

と、みんな出遊びにお出でになりまするが、どうするか知らんと思
うと、また、

「芝居行きがよかろう」

相方の女子がゴジヤゴジヤ言うちゅうと、じつとしていられません。
芝居へさしてお出でになりまするが。

丁度ここにありました船場^{せんば}の番頭でござります。親方の金をば使
うてるちゅうのんでやすさかい、親方はちよっともご存知じやござ
いません。女子がために、あんた、弁天座へさして芝居行きちゅうや
つ、具合のええもんですな。丁稚一人連れよって、相方の女子と、ば
あやんの芸子と、お茶屋の姉貴と五人連れちゅうやつ。芝居が段々
すんで仕舞いまするちゅうと、夜^よに入りましてな、アアモシ、もう
二幕で仕舞ちゅう時分に、小僧を呼びなはって、

■「アアコレ、亀吉や」

▼「へエ、番頭はん何で」

■「ハア、どこへ行ってたん」

▼「いまアノ幕しましたんでなあ、で、わしアノ、小便いっとります」

■「アアそうやったか。すまんけど、もう二幕ほど残ってんねが、見せてや
りたいけども、家の首尾があるのんで、いんでもらいたいと思うて」

▼「へエよろしゆ、よろしゆおま。帰らしてもらいます。なんのあんた、二
幕くらい結構で、こんだけ見せてもろうたら、番頭はん結構でやすから」

■「アア、また今度あらためてな、近日お前一人やってやるけえ、今日だけ

は、いんでもらいたい」

▼「へエ、心得やした。何ぞご用事」

■「イヤ用であらへんのやけどな、家に帰ったら、旦那様にそう言うてくれ。番頭どんはとお尋ねになったら、今宵は井上はんの手形の事でちよっとヒマがいらいます。井上の旦那様と二人で酒を召し上がり上がり、手形の方の話していただけます。遅うなりますので、お店一党寝てもらいまするように、旦那様にもその事言うてくれと、こう仰りましたと、こう言うてな。そっち先に帰っておくれ」

▼「よろしやす。そなら、帰らせてもらいます。へエ。そちの姉さん、ごゆっくり。そちらの、ちよつとアノ……、アノおぼはん」

◇「おぼはんでなんやね」

▼「こら、おおきに失礼。どうも姉貴」

■「生意気な物言いすなて」

◇「いになはつたら、番頭はんの事、あんじょう言うといてあげて」

▼「へエ、よろしやす。とにかくまあ、どん尻まで、お頼申します」

■「そんなおかしげな物言いすな、コレ。サアいんでくれ。コレコレ、ここに一両あるで、エー電車ででも乗って行くか、自動車でも乗って」

▼「おおきに。番頭はん、いつもこれ気付けてもらいまして、わてホンマにもう、番頭はん好きでやんね。第一どこに行きなはっても、わし、お供させてもうております。とにかくこの一両も頂きましたら、また家に帰りましてなあ、御祝儀にもらった一両でなと、うまい事言うときますさかい」

■「そんなおかしげな物言いすな、コレ。あんじょう言うときや」

▼「へエおおきに。さよならどなたも御免、御免。ハハア、有難いなあ、こらあ、バーンと一両もろうて。ええ番頭はんや、うちの番頭はんは。どこへ行くかて、わい、お供させてくらはんねん。番頭はんはさえ付いて

行ったら、もう小遣い銭に不自由せえへんねや、有難いな。しかし、これからいんだとて、お店、みんな寝とるやろ。いつも番頭はんと二人で、

『お帰り、番頭さんお帰りでやつせ』

慌てて表開けてくれよんねけど、今日俺一人いんだくらいでは、なかなか急には開けてくれへん。

『誰や』

『亀吉でやんね』

『一人かえ』

『へエ』

『しばらく待ってえ』

何の事ない、□□□□入口で長いこと待たしときやがる。夏はええけど、寒い時分に、あの入口で三十分も待たされるの、かなわん。ここは一つ脅かしたろ。入口ダンダーンと叩いて、番頭はんお帰りでやつせーて言うて、おどかしてやろ。びっくりして表開けて、俺一人やったら、

『お前一人か』

『へエ』

横面の一つくらいいきよるやろけどな。頭元手にして、一つ表早う開けてもうて、早う寝る工夫したろ。それがええ、それがええ。有難い、有難い。言うてる内に、戻って来た。表たいたる」

——ドンドンドンドン。

▼「モシ、ちよつとお開け。番頭お帰りでつせ、番頭お帰りでつせ」

△「アアよっしゃいま開ける、いま開ける。旦那へ、大層気にしとる。番頭はん戻って来た。番頭はん戻って来た。表開けて、表開けて。オイオイ、オイオイ、定、定、表開けて、番頭はん戻って来た」

「へい」

——ガラガラ、ガラガラ。

「へい、お帰り」

「番頭はん、お帰り」

「へ、お帰り」

「お帰りやす」

「お帰り」

△「お帰り……、あれ、あれえ、あらあ、亀、お前一人かえ」

▼「へえ、わたい一人でやんね。番頭はん一人でお帰りなりまねんけどな、井上はんのんで遅なりましたんで」

△「何を言う、番頭はんお帰りって、俺アびつくりしたかな、俺ア。井上はんが、なに」

▼「井上はん手形の事で遅うなりましてな、それでアノ、家へいんでそう言え、ちつと遅くなるさかいに、店一党寝てもらえ、遅いとかわいそうなさかい言うてな、へい。言うてられます」

△「なんなら、のっけにそう言え、そんならそれと。番頭はんお帰りちゅうさかい、俺アびつくりしたがな。奥に旦那様が待つてござる。奥へ行きな、奥へ行きな。旦那様とその事言いなはれ」

▼「へエ、奥行つて旦那様に」
 △「ア宵から待つてござる。番頭の戻りが遅いなあちゅうて。奥へ行きなはれ」

▼「へーい。旦那様、ただいま」

○「ハイ。オオ亀吉かな。番頭どんはどうしましたな」

▼「へい、あの一緒に帰るはずでござりますけど、井上はんの方で、手形の事でちよつと遅うなりますそうぞうで。帰つて旦那様とその事言うとき、こない言うてな、へい。遅う遅う帰るけども、手形の事で遅うなるのやさかい、ちゅうて。で、井上の旦那と二人で、なんかこう、ご酒を飲み飲み、

こう二人が話をなさるの」

○「ハア、こと何やな、番頭は井上さんの方で、手形の事でゴジャゴジャするちゅうのやな」

▼「へー、ハイ」

○「で、井上の旦那様とご酒を飲んでなはんのかえ」

▼「へエ、アノまだ、いまだに飲んでいられますの」

○「そらあおかしいなあ。いま井上はん家において、お帰りになったとこやで」

▼「エエツ、するとなんぞか、井上はん、お帰りになりました」

○「オイオイ、いま家において、お帰りになった井上はんが、番頭と二人、酒飲んでんのかえ」

▼「へエへエ、そら何が何で」

○「何が何や、何が何や。貴様、嘘ついてるな」

▼「イエ、わてホンマついてまんが」

○「ホンマついてるつてやつあるか。今までお出でになった井上はんが、番頭と酒飲んでるような事がないじやないか。貴様、何か隠してるな。よし、隠すなら隠しなさい。家の番頭は、いつまでもわしや置いとかんつもりじや。明日はもう宿に引かすつもりじや。平生からちよいちよい何じや、収支がおかしいと思うた。帳面すら見てみると、方々に穴がいっぱいある。ああいう米食う番頭、家においてたらどんならんで、明日は、わしや断り言うてしまふ。エエツ明日になったら、足上げてしまふつもりや。貴様もそうやつて番頭に付いて言わんのやつたら、放つてやる。その代わり、明日、貴様の叔父を呼びにやつて、貴様も一緒に断り言うてやるさかい、そうせい」

▼「そんな、そんな、殺生でやす。そんなあんた、わて、とばちちりやわ。もう一両でこんな断り言われたら、つらい」

○「一両で断り……、ハハア番頭に一両のまいないもろうたな。よし、番頭

が一両出すのやったら、わしが一両やるさかい。で、わしにその番頭の行つてるとこ、みな言うてしまえ」

▼「ハイハイ、するとなんじやな、あんた一両おくんなはんのやな」

○「アア、一両あげるで」

▼「そしたら、そんなんやったら、御主人に仕えな損や」

○「おかしげな、損やの得やのと。貴様、誰に給料をもろて、まま食べさせてもろうてる。ご当地で奉公して、わしが主人なら、わしに仕えてるやないか。月給はわしからやるんやないか」

▼「へエ、そら月給はあんさんから頂きますけど、小遣い銭は番頭さんから頂いております」

○「何ぬかしてんねん、アホ。言うとなんな事言いくさるねん。どうしても言わんのか」

▼「そんなら、言います。そないなったら、いなされるやったら、言わな損じや。だけど番頭はん言うてはりましたで。アノ腕時計、ゴムの付いたん、買うたる言うてはりましたで。且様かて、買うてくんはるかえ」

○「アア、腕時計ぐらいなんでもないこっちゃ。わしも買うてあげる。で、番頭の居所、言いなはれ」

▼「へエ、そんなんやったら言いますわ。実なあアノ、番頭はん、井上はんは嘘でやんね」

○「大概そんなこっちゃと思つてた。番頭どんはどこにいてたな」

▼「アノ日本橋北詰のな、アノなんでやんね、東側の家でやんね」

○「ハハア、そこに手掛でも、置いてあんのんかい」

▼「へエ、そこに腕時計を売ってまんねん」

○「そんな事尋ねてへんわい、何ぬかすねやアホ。番頭の居所を尋ねんね」

▼「実は南地」

○「ハア、南地。南地どのへんやな」

▼「難波新地、お出でになりまんね」

○「ハア大概そんなこっちゃと思つたんじや。なにか難波新地のお茶屋ちゅうて、なんちゅうお茶屋いてんのじや」

▼「アノ中筋端にちよつと西入ったとこに、大源ちゅう行灯あんどんが掛かつて、そこにいられます」

○「ハア、そこにやっぱり番頭がいるねな」

▼「いえ、そこにおいでになりましたけどな、番頭はんの相方の女子はんが、

『アノ番頭はん、こんなとこいつまでもいて酒飲んでたら、もう陰気くそうおますさかい、芝居行きまへんか』

言うてな、言いはったら、

『いや、今日はそんな事してられん。もしや芝居にでも行くは、人に見付けられたら、わしや来年別家せんらん身やさかい、そんな事できへん』

言うてはったら、また姉さんのな、あのおんばさんしてはった芸子はんが、こら年増の人じや、その人が、

『そんな事言わんと、なんじや芝居に連れて行つてあげなはれな。ちようどんじや弁天座で高嶋屋が芝居してまんね。あれ見に連れてあげなはれな』

言うてな、鼻で押すように言いやつたら、番頭はん、

『お前まで言うたら、どうもならへんがな』

て言うてな、

『なら、どうもしやない。弁天座へ、なんじやい、電話しいな』

言うてな、それで棧敷とらしてな、へエそれでしばらくしたら、自動車が表に回つたある。そしたらアノ、番頭はん言わりますねん、

『自動車、回つたはええけど、高いのいなよ。一円のタクシーでええぞ』

言うてな、番頭はん、割方こまこういきはりまんね。そしたらあんだ、タクシーが来てます。四人乗りのタクシーでやんね。それで、わてな、わたいと番頭はんと、それと番頭の相方の女子はんと、それであんだ、それにおんばさんしてはった人と、お茶屋のおかみさんと五人ですよん、な。そして、あんだ、自動車で番頭はんと女子はんとこう隣同士乗って、その向いさして、なんじゃで、お茶屋のおかみさんと隣に年増芸子と乗ったん。で、わたい乗ろうと思ったら、ほったら、自動車屋が、

『四人乗りやから、あんだどもならん』

こない言いよるさかい、わて番頭はんに言うたんです、

『番頭はん、わてどないなりますねん、わて』

言うたら、

『アそやそや、お前こぼれとつたな』

言う。わて、こぼれとつた言われてまんね。

『どうしょ』

『どもなりまへんがな』

『ヤアうっかりしたなあ。マアアええがな、こいつ蹴込みの下でも入れるわいな』

わて、手荷物みたいに思われまんねん。わて、蹴込みの下ずつと入ってたんで。そしたらお茶屋のおかみさんが、□□□□□、

『そんなとこ入らんでも、だんない。あんだ、あたいの股座またぐらに入ってたええで。わたし、ここでぐつと押さえてあげるさかい』

言うてな、向うのおかみさんのあんだ、股座のところに首突っ込まれて、押さえられてまんねや。それで、芝居見に行ったん。そしたらあんだ、芝居がこうなんじゃして、可笑しおまつせ。番頭はん、幕が開いた時分は見てましてな、幕が閉まると、次にな、うつむいて、あの女子はんの膝へこう枕なさんので、そしたら女子はん言はりまんねん、

『何しておいやすねんな、膝におつむお乗せやしたら、足痛うおますがな』

言うたら、

『マアアしばらくさしてくれ。この幕が閉まったら、人が方々見るさかいに、もしや、そのなんじゃで、得意先のお方に見付けられたら具合悪いで。しばらくの間、あの辛抱して』

言うたら、

『そんな事したら、足痛うますわ』

『それからして、膝枕したら痛いじゃろ。ええ役者ばかりいてるさかい、役者や皆の膝枕やったら、お前、得心するのやろが』

て番頭はん言いはったら、

『ようまた、あんな事お言いやすことわいな』

言うてな、そしたなら番頭はんの、なんでんねん頼つべたをキュツとひねったら、番頭はん、

『痛い』

○「コラおかしい声出すな、コラ。気味の悪い声だすな。何ぬかすのや。もうええ、もうええ。そこまで言うたらええ。そいで今夜、番頭がもどつて来たたら、決して、わしにこういう事言うたつちゆうこと、ならんぞ」

▼「へエ」

○「知らん顔してんね。明日になったら、あの番頭はいなしてしまふ。もうせんどから、いっぺん足上げてやろうと、思つててけど、ちよちよちよちよと人が中に入ったもんやさかい、今日まで放つてある。そちはこいうやつて言うたさかい、決してそちはいなさん代わりに、明日から決してややこしい事することならんぞ」

▼「へエ、そんならあの、寝させてもらいます」

○「アア、寝たらええさかい」

▼「そんなら旦那様、何ですやすすかいな、あの、すまへんけどあの、あの銭一両と時計やらみな、貰えませんか」

○「何ぬかすねん、アホが。そんなもんやることあるか。表出て寝なはれ」

▼「へエ、お休み」

○「アアあんじょうに用心しなされや」

▼「へエ」

——丁稚はこわこわ表へ行きおつて、わが店の間で寝ようと思つて、なかなか寝られません。番頭はんは、どうなつたか知らんと心配している。ところへ、番頭ですなあ。芝居は、あんた一場残しまして、やっぱり主人の家は気になると見えて、表へ自動車へ言いやって、それへさして四人が乗りなはつて、主人の表の二丁越し、向うの辻、自動車がトーンと止まりまするちゅうと扉が開く、番頭一人がパツ出よるちゅうと、女子はんが下まで降りてきて、

▽「番頭はん、お近いうちに」

——と背中の一つも、ポンと叩く。番頭めは、それを耳に残したはずや。

■「ハア、また行くぞ」

——そんなり、わが主人の表へ。偉そうに言うてるものの、あんた、やっぱり主人は怖いもんや知れません。入口へ来ても、戸をドンドン、よう叩かん。小さい音で、トントン、トントン。

■「佐七とん佐七とん、杉吉とん、定吉、定吉、ちよつと開けて、ちよつと開けて」

△「へいお帰り、オイオイ、オイ、ホンマが戻つてけつかる。ホンマもん戻つて来たんや。オイ亀吉とん亀吉とん、定吉とん、みんな起きいな。いつも素で戻つて来やはつたことあらへんがな。いつも戻り際に土産買うてきてくらはんねがな。眠た目にしいな。オイ杉吉とん、目エこすらんと、着物きいな、着物きいな。まだ表開けな、まだ表開けな。いま開けます、

ちよつとお待ちを。着物きて、シャンとして。イヤ遊びに行つてはんのやあらへんがな。この番頭はん、なかなか気の付く人や、そやないかい。ちゃんと着物きて、ちゃんと前シユツと頭ならべて、待つてあげい。ええか、商売へ行つてはつて、戻つてみんなが寝てると、気が悪いもんやねん。サアええかええか。みんな座つた。表開け、表開け」

「へエ」

——ガラガラガラ。

△「へい、番頭はん、お帰り」

「番頭はん、お帰り」

「よう帰り」

「よう帰り」

「よう帰り」

「よう帰り」

「番頭はん、お帰りやす」

■「はい、アアご苦労、ご苦労。はい、ご苦労。はいはい、夜更けてすまなんだ。ヤアご苦労。ヤアもう放つといて。ヤアおおきに、おおきに。ヤアご苦労やつた。サア、しょうもない物やけど土産や。エーどうぞ、店一党、食べとくれ」

△「おおきに、おおきに、おおきに有難うさん。どやどやナ、番頭はん、これが気がつくねん。おおきにご馳走さん、おおきにご馳走さん。遠慮なしに、遠慮なしに頂戴します。アノ、お店アノ、いいえ、アノちゃんと、帳場とかあんじょうしております」

■「アア」

△「二階に寝間をひいてござります。どうぞ、お上がりな」

■「はい。じゃもう放つといとくれ。わしは二階に上がるでな」

——番頭めは我が寢床の二階をさして、トントントントンと上がつて行

く。二階で手をポンポンと叩いて、

■「亀吉、亀吉」

▼「へエ、へエ番頭さん、お帰りやす」

■「アア今日はえらい、ご苦労やったな」

▼「いえ、ええ目させてもらいました」

■「アア、主人のところ、あんじよう言うといたかな」

▼「へエ、日様、あの、あんじよう言うてござります」

■「アア結構、結構。今日は芝居、どっから帰った」

▼「あの小平太が、あの殺されまして、あの川へはまったところから、帰ったん」

■「アア可愛そうに、あれから向うがよかつたんじやい。こうしよう。今夜、寝られんのんじやい。ちよつと仕方嘸で、あの幽霊の出るとこ、一つ、わしや見せてやるかい」

▼「番頭さん、結構で」

■「そんなら、こうしよう。そこにあるその行灯をこつちへ持つてこい。そうそうそう、わしの横手へ置け。押入れにその蚊帳があるじやろ。それ出して、二つとも吊れ、そうそうそう。正面へ回って。仕方嘸で、幽霊の出るとこ、わしが身振りで、ちよつと見せてやるで」

▼「番頭さん、どうぞよろしゅうお頼申します」

■「ああ、ええところがあつたら、手をたたけよ。そうそう、ちいと膝へ手を置いてはなれ。」

『アア世に入れば、この身の病。隅田新田を引上げて、この本所の割下水、隣同士の挨拶と、行って見たのが敵同士、小幡□□の小平太とは、こいつア、夢にも知らなかつた。これにひつかえ、現西がかどわかったる娘のおふさ、今宵のうちに宿場へばらし、金を握ってひと儲け、こいつア高飛びしなくちゃアならねえなア。ヤアツ、わりや小平太、お

前また迷うたなア」

『はい、はい、迷いました、迷いました。という訳のあるものか、ないものか、綾瀬川の無惨の最期、生き代り死に代り、恨みを晴らさで、おこうや』

▼「ワアこらびつくりした、番頭さん、びつくりしましたがな」

■「どうじや、わしがこう行灯からスーと抜け出て」

▼「へエ」

■「蚊帳へスーと消えるとは、わしの胴体がスーと、こう上に、宙に上がるように見えるやろ」

▼「へエ、宙に上がるのは番頭はん、当たり前でやんね」

■「そうか」

▼「へエ、もうとうに足が上つてやんねがな」

(後囃子)

参考資料2

『辻占茶屋』立花家花橘

ニッポレーコード
L 61

(前囃子)

- 「サア、マアこっちへお上がり」
- 「へエ、おおきに。おっさん、いま京都から帰ってきましてな」
- 「ハアそうかい。その布団をいろいろてみ。まだ温みが残ったるやろ」
- 「へエ」
- 「今までお前とこの母者が来て、お前の事を言うて、涙こぼしての話じゃ。この頃お前、夜泊まり日泊まりをして、ちっとも家に帰らんそうなが、おかしい所に入り込んで、博奕でも打ってるのと違うのかい」
- 「博奕、ウエー滅相もない」
- 「嫌いかい」
- 「ウワー好きや」
- 「おかしい言いようすない」
- 「好きでおましたんやけども、あんな事はするもんやないと思うて、もうぶつつりやめてね、もう見向きもしまへんね」
- 「感心、よう止めなはった。ひよつとしたら、女子でも出来たやなかるうかと言うてたが、そやないかい」
- 「へへ、おっさん、それでやんねん」
- 「ナア早いもんじゃ。ちゃんと女子でもこしらえてある。そで、その女子ちゆうのは白かえ、黒かえ」
- 「へエ、横町で吠えてたんは、ブチでやつせ」

- 「誰が犬を尋ねてるかいな。素人さんか、玄人さんかちゆうねん」
- 「そら玄人のでける勤め人でやんねん」
- 「言うことが丁寧な。島はどこや」
- 「あててごらん」
- 「南地ミナミかえ」
- 「いいえ」
- 「新町かえ」
- 「いいえ」
- 「堀江かえ」
- 「いいえ」
- 「北の新地かえ」
- 「いいえ」
- 「松島かえ」
- 「いいえ」
- 「どこじゃえ」
- 「いいえ」
- 「何を言うねん。どこやいつて」
- 「へへエ、実は難波新地」
- 「それをのつげに言え。難波新地としてみたら、娼妓さんでも追い回して
るんのやろ」
- 「あなずるのは、おやまでおやす」
- 「同じこつちやがな。で、難波新地のどこやねん」
- 「中筋」
- 「中筋の店は」
- 「店は神崎屋でやんねん」
- 「ホウ、神崎屋か」

●「あんた知ってなはるか」

○「えら知りや。神崎屋の主さんとは、おさな友達。いまだ始終出入りするさかいに、あすこの抱えやったら、わしや大抵おぼえてるが、神崎屋の誰や」

●「なんのかんのもって、名前聞いといて、あんたこつそり買いに行こう思うて、何をさらすんね、このドスケベ」

○「何ちゆう言いようするねん。そんなアホな事するかいな。神崎屋の誰や」

●「神崎屋の梅乃でやんね」

○「コレ、梅乃というたら、ありや岡山から仕替えて来た女子やろ」

●「へエへエ、そうでや」

○「背の小作りな、色の白い」

●「こそ、そうでや」

○「鼻のつんと高い、目のぱっちりした」

●「へへ、耳の二つある」

○「そらあたりまえやがな。そらあかん。だまされてるさかい、お聞き」

●「そら、だまされてえしまへん。わたい言うたつたんや、こないだも。なあ、

『そんな程のこと言うて、しまいに俺をだますのやろ』

とわたい言うたつた。そしたら、

『人がどんな事言うたかて、人の言うことほつときなはれ。あんたとわたいとが二人が、じっくり決めといたら、ええやおまへんか。はたのお客さんがだましたかて、あんたばかりはだまさしまへん』

て、こない言いますねん。どうでやす。わたい言伝ことばやつたら疑いませ。現在本人の口から、だまさへんと言うてますねんがな。こんな固い事おますか」

○「何が固いもんかいんな。それがだまされているのや。というのは、あの

女子には兄があるやろ」

●「ホンマによく知ってなはるな、おっさん。兄おます。こないだ、わて会いました、へエ。ただいなすのも悪いと思て、五円小遣いやつたん」

○「ちゃんと取られてけつかる。あの兄というのが、あら男や」

●「エエそうでや、男で」

○「いいや、兄というのは男や、ちゅうのや」

●「エエそうで、兄は男や。姉なら女子や」

○「その兄が間夫じゃ」

●「間夫はわたいや」

○「どこまでのろけてんねん。どんなところから、またそない、深うなつたんや」

●「へへ、おっさん、そも馴初め、聞いとくんはなはれ。いっさんとな、それと梅はんとわたいと三人づれで、南地ミナミに遊びに行たん。拍子の悪い、雨でやんね。雨に降られたさかいつて、ええ若い者が逃げて帰るちゅうのも癪に障るで、三本だけ、ちよつとくすべてみよかと、ある茶屋に入つたら、拍子の悪い、一人も出来まへんねん、娼妓さんが。他の二人は貰い掛けたりしてませ。わたい馴染みの何にもない。相方が出てるのやつたら、しよがない帰ろうかいなあと、火鉢のところで、一服してますとな、男衆が、

『梅乃はんが今あきました、遅おますかいな』

『ア、えらいええ子があいたんやしな。直ぐに入れておくんなはれ』

『へエ、かしこまりました』

じきに送つて来たんが、この梅乃。

『おかあちゃん、おおきに有難う。どうぞまた、きつと差し込んでおくんなはれ。お客さん、どなただんね』

『そこにいやはりますか』

『オヤ、あんたですか。今晚はおおきに有難う』

て、こない言いやがんねん。わたい、言いやないさかいにな、

『どうも降りますのに、おおきにご苦労はんでございます』

○「そない葬式送つてもろうたみたいに言わないな」

●「そこへ、牛がばばしたように、ベチャベチャベチャと座りやがってな、

『おかあちゃん、すまへんけども、ちよつと鉄砲貸してちょうだい』

と、こない言いやがる。鉄砲貸してくれ、さてはわたいを銃殺する」

○「大層な事言うない」

●「モシ、長煙管のこと、鉄砲ちゅうまつせ」

○「知ってるわい、そんな事」

●「その長煙管を持ちやがってな。煙草をば、キュツと詰めおるのやが、う

まいこと詰めよるなあ。どこでどう研究しているのか知らんけども、分

量が決まったもんです。つまみ上げた煙草が、煙管の膈皿に不都合もな

ければ少うもなく、きつちり一杯という。あんな詰まった手に、わたい

水車米はからせたら、損はしとらへんやろと思えますねん」

○「余計な事言うない」

●「何ちゆう煙草か知らんけども、そら火付きのええ煙草。火の横面ポーン

とはると、ちゃんと火が付いてある。一服すいやがって、二服目に吸い

口をキュツと拭いて、

『あんた、ごめん』

て、差しやがんねん、へへ。

『えらい折角だすけども、わたい煙草嫌いでやんねん』

と言うたつた。

『煙草嫌いなお方が、煙草入れや煙管持ったりしますすかいな』

『そこでんがな。あんたが親切でくれた煙管やったら、別に吸い口は拭

かいでもええやないか』

て、こう言うたつた。

『マア、左様か。わたし汚いと思て、拭いたんですわ。そしたら拭いた

んがいかんのなら、今度は拭かずに出しますわ』

ちゆうて、出しよつたらなあ、エエ、吸い口のところに、ツバの泡が二

つ溜まってあんね。こいつ落したら勿体ない思うて、ズーと吸うたら甘

露の味がした」

○「そんなアホな事すさないな」

●「そつたらもうし、こない言いますねん。」

『あんた、定めしこの島にお馴染みがおますのやろけども、そのお馴染み

が出来んで、大方ことかけにきらして、おくんははったんやろ。あ

んた、これ切り掃いたら、イヤでおます』

て、こない言いやがんねん。わたい言いやないさかいに、

○「別に掃けしまへんけども、箒屋町におぼはんが一人おますねん』

●「嬉しくない姉貴がな、

『こんなとこで、イチヤイチャ言うのいや。一自身の私がつまらんわ。

二階へ行きななれ』

『それみなはれ、おかあちゃんに、たんと叱られましたわ。そしたら二

階へ行きまひよか、こちの主』

て、こない言いやがんねん、もうし。煙草一服吸いつけてもろうたばか

りで、『こちの主』でやすと、ホホホ。有難いおことばやおまへんか。ハ

ア、わたいどつち向いてる」

○「座ってる方角もわかつたらへんのやがな」

●「どうぞ、おっさん、母者人から預けてあるあのお金で、身請けしてもら

えまへんかやろか」

○「よし。その位お前が思い詰めている女子やったら、身請けしてやろうじゃ

が、しかし、その女子の気が分からん。いっぺん気引いてこい」

●「へエ、氣引くつちいますと」

○「なにくわん顔して行け」

●「そらわて、何も食べずに行きま」

○「何も食べずに行くのやない。心配そうに、お前がふさいで行け。そんな深い仲やったら、あんたえらい心配そうにしてなはるが、どないぞしなはったんかと、聞きよるに違いない。尋ねられたら、こう言え。仕事場で今日、友達と喧嘩した。わずかなことばの意地張から、有り合わせた刃物を投げたら、当たり所が悪うて、友達が死んでしもうた。人を殺したら、生きていられん。俺はいつそ死んでしまおうと思う。俺が死んだら、今日が命日と思うて、香花の一本も手向けてくれ、こう言え。アア左様かと言うような女子やったら、あかん。あんたがそういう場合なら、わたしも一緒に心中をと言うたら、しめたもんじゃ。四ツ橋あたりへ引つ張って行け。川へ行け、川へ。南無阿弥陀仏と、飛び込もうとしたら、心底見えた女房共と、家へ引つ張って帰っておいで。その位な心意気のある女子やったら、なんぼ借金があろうとも、俺がきれいに立て金してやるわ」

●「ヤハハハ、おっさん、ホンマでやすか」

○「ブン」

●「きつと言いまっせ。けど後でそら嘘やっただてなこと言うて、あんた逃げなはらへんか」

○「駄目おすない。わしが一旦こう言い出したら、一寸も後へ引かんわ」

●「そら、後へ引けんわ。後る壁や」

○「アホな事言うない。しかし、お前に言うときが、辻占見徳つじうらみんとくということがあるで。行く道でやな、ええ辻占を耳にしたら会うといてやが、悪い辻占を聞くようなこっちゃやったら、もう会わずに帰つといで。わかっただか。待ち待ち。どうせそんなことやったら、小遣いもないのやろ。サア、こ

れ持つて行き」

——と、粹なおっさんでございますな。小遣いまであてごうて、放り出した。喜び勇んでやってまいりました難波新地、色町にかかります。いつに変わらず賑やかなこと。

(囃子)

唄、辻占屋、松葉かんざし豊算

「瓢箪山稲荷の辻占屋でござい」

●「姉貴、こんばんわ」

△「マアおいでやす。お久しぶりですことマア、源さん、どうして。ちょっとこれ、おちよやん、座蒲団持っといてんか。マアあんたが長いこと顔見せてやないので、梅乃はんが毎日うちへ来て、あんたの事言い通し。仰山のろけ聞かされてまんの、随分おごってもらわんならんの。ハア、よろしおます。すぐに呼びにやりま。コレおちよやん、わかっただあるか。出来なんだから、貰い掛けて。で、源さんが来てはると耳へ入れなはれや。サ、どうぞ二階へお上がり」

●「有難う、上げてもらうわ」

——トントントントントントン。

●「ぼてや商売つてのは、いつでもええもんやなあ。ここの姉貴がお世辞もんときてけつかる。姉貴こうしてんかったら、いやと言いやらんなあ。今夜泊るわったら、ハアええでえなあ。二三日居続けするわったら、ハアええでえなあ。何でも、ええでえなあ。詰まらんさかいちよつと節季の払い待ってや、ハアええ……、そら言わんわいなあ。あいつ言いよるとホンええのやけど。しかし待てえよ。梅乃が来るわ、こうこういう訳やでったら、びっくりするやろな。心配さすのん可愛そうな。けど、おっさんの命令や、しようないなあ。

『あんたがそういう場合なら、あんたばかり殺さしまへん。わたしも一

緒に心中を』

と言うよるで。へへへ、明日から、

『かか』

『ハアあなた』

てえなもんで、円満なる家庭、作つたらんらん。アレなんじゃ、ここに辻占が落ちてあるで。おっさん言うてた。辻占見徳が肝心や、ええ辻占なら会うてこい、悪い辻占なら会わずに帰れちゆ言いおつたな。梅乃の心底はこの辻占にありちゆうやつや。どんなこと書いてあるか見てやろ。なに、

どふぞどふぞ……

けつたいな辻占やな。アどうぞどうぞか、

来てくれねばよい

と、フン馬鹿にすない。悪い辻占が出やがんね。たのんまつせ、ホンマに。ア、ここにまた落ちてある。あら人の見たやつや。これは昆布に巻いたなりや。ハハ、昆布だけつけねか、梅乃の昆布やと思うたら、よけい美味いわい。梅乃の心底はこの辻占にあり。乾元亨利、乾元亨利、ど

うぞええ辻占が出来ますように。なに、

見れば見るほど……

か、嬉しいなあ、

見れば見るほど、けつたいな顔

ワアー馬鹿にすない。ロクな辻占出やがらんね」

●「ホウ隣座敷、しんねこもんで、粋な世界やな。調子合わしてけつかる。よし、隣座敷に弾く三味線、これを見徳に聞いてやろ」

「ん、かわいい男に逢坂の、関よりつらい世のならい

「マ隣で弾いてるのは、あら『由縁の月』やな。かわいい男に逢坂の、関よ

りつらい世のならい、ええなあ。いっぺん、中の芝居で見たで、これ。

弾くわ、弾くわ、あの唄で思い出す、去年の月見は吉田屋で、太夫とわしと連れ弾きに、弾いた時の面白さ。その弾く主は変わらねど、変つたはわしが身の上、あいつの心底あのように、マアどうとは

なんて、これから奥に、ええ文句あるで。人の心と飛鳥川、変わるは勤めのならいじやもの、変わらいでなんとしよう。おやあ、こら辻占がいかんでえ。人の心と飛鳥川、変わるは勤めのならいじやもの、そしたら梅乃は勤めの身や、あかん。心の変つた梅乃をば、あんけらんかんと待つていようより、いっそ逢わずにいんでやろうか」

「ん、待たしやんせ

●「エエ」

「ん、源太さん、お前と一体、こうなつたは並大抵のことかいな

●「おっしゃる通り。こうなつたのは、並大抵の仲やないがな。母者人には心配かけ、おっさんには意見せられ、世間には義理の悪い借金して、苦労してる仲やがな。いまやったのが、あら梶原源太やで。おれの商売が鍛冶屋で名が源やん。向うの相方が神崎の梅が枝、俺の相方が神崎屋の梅乃。梶原源太、鍛冶屋の源やん。神崎の梅が枝、神崎屋の梅乃。辻占すつくり合うてけつかる。なんて聞がいでしょ。待てよ。そらええけども肝心の梅乃、遅すぎるなあ。もう来んらん時間やが、ハハア、遅いところみると、こらひよつとしたら、よそへ花にいつとんのやな。貰い掛けたつてことなら、あかんで。貰い掛けた女子に出来たためしなや。むこかて、嫌味の一つも言われとる。

『オイ、貰いが掛かった、行つといで』

『わたい、行くのいややわ』

義理にでも言わんならん。

『なにぬかしてんねん、好きな人が来てるのやろ』

『好きな人だったら、わたい一人しかあらしまへんわ』

『その一人の人が来てるのやろ』

『その一人ったら、あんたより他にあらしまへんがな』

『ホンマかいな』

『ホンマだんがな』

『可愛い奴つちや、こつちい寄りいな』

つてなこと言うて、いちゃついてやしょまいかな』

唄、世話焼かしやんすなあ、お前さんのお世話になりやしよまい

- 「それなんぬかすねん。世話焼かしやんすなあ、お前さんのお世話になりやしよまいとは、なに、なに一つ言いやがねん。世話焼いてないか、羽織買うてくれ、芝居行かせてくれ、小遣いくれと、散々世話をやいてあるぞよ」

唄、カラッケツの空財布、財布はカンカン、いかのぼり

- 「それ何ぬかしてやがねん。今はこうしてカラになったわい。これでも元は一杯あつたんじやい。おのれに入れて、入れ揚げてしもうた結果が、こないになつたんじやい。そんな水臭いことぬかしたら、これから家に帰って、おっさんにこの訳言うて、もつとええ女子を身請けしてもらって、おのれとこの表を手ひいて、通つてやるぞよ」

唄、こちやかまやせぬ、いとやせぬ

- 「ああ言や、こう言う、クソツタレめが」

— 気が上^{かみ}ずつてやす、慌てて梯子段の降り際まで行たかと思うと、足を一つ踏みかぶつて、コロコロコロ、ドスン。

- △「マアマアちよつと源さん、何事だんねん。えらい音さして。あんたも余程^{よっぽど}お上りさんやしな」

- 「ナニ、今日、京都から下り下りやがな」
(後囃子)

参考資料3

『高津の富籤』 笑福亭枝鶴

ニッソーレコード
L 81

(前囃子)

——エー、大川町に宿屋さんの沢山ござりました時分のお噂を聞いていただきます。

宿屋商売、気苦勞な商売で、夕景には表の方を清潔にいたしましたして、何でもええお客様を迎えんならん。待つてまするところへ、お越しになりましたのは、年の頃は五十五、六でもござりましようか、田舎風の方で、

■「ハイ、御免なされや」

○「お越しあそばせ」

■「お前様とこは宿屋さんじゃな」

○「へいお見かけ通り、旅籠渡世をしておりますので」

■「なにか、一人でも泊めてもらえるのかいな」

○「モウお一人様がお半分様でも結構で」

■「お半分、エエ兎に角も厄介になることにしよう」

○「どうぞおしまい下さいまするよう」

■「ちよつと金の取引きがあつて、こつちへ出てきた。五日と想うてるが、十日も厄介になるかわからん」

○「どうぞごゆっくりと」

■「なにか、十日もいようと思つて、前もつて五十両と百のお金は預けとかならんじゃろな」

○「恐れ入ります。こんな小ぢやな宿屋でござりますが、幾日逗留していただきますでも、勘定はお立ちの節にいただきましたら結構で」

■「イヤ、兎に角も厄介になることにしよう」

○「どうぞおしまい下さいまするよう。コレ、あの旦那様のおすすぎをおとり申せ」

■「イヤイヤ雪駄履いてますで、足は汚れたない。手拭を一つ貸しとくれ」

△「旦那様、これに」

■「アアそうか、はばかりさん。間はどこじゃな」

○「二階へご案内申し」

△「旦那様、どうぞこちらへ」

■「アアそうか、アアやれやれこれで落ち着きました」

○「有難うさんでござります。ぶぶをいれましたので、どうぞぶぶを一つ」

■「そうか、よばれましよう。ママこつちへ来て一服しなされ。この頃はどろじゃな」

○「おかげ様と、ぼちぼち」

■「イヤナニ、商売やとてな、ぼちぼちなら結構じゃ、ハハハハハハ。今も言うた通りな、ちよつとエエ二万両程の取引きがあつて、こつちへ出て来た。金のこと五日が十日、十日が半月と長引くかわからん。イヤイヤこんなみすばらしい風をしてるでな、何じゃいなと思つてじゃろがな、実はわしは因州鳥取の在の者で、所では少々金持ちじゃ、ハハハハハハ。イヤイヤ我が口から言うのもおかしいが、言われておりますのじゃ。アアこりや話のついでじゃがな、丁度こつちへ来る一か月ほど前の事、夜中に若い者がワアワア、ワアワア言うてるので、何事が起つた知らんと出てみるとな、皆が向う鉢巻、手ん手に割木を掲げてるで、

『コレどうしたもんじゃいな、仰々しい』

『旦那様、おさまつてござるところやござりません。賊がまいりました』

『なんじゃ賊じゃ。賊言うたら盗人様じゃがな、金が欲しいでござったんじやろ。もし手向いして怪我でもしたらどうする。金で命は買われやせん。入って持っていんでもらえ』

誰一人として表開けに出る者が無い。わしが庭へ飛んで下りてな、大戸ビユーと開いたら、なんと賊が十七人、ドヤドヤと入って来よった。それから金蔵へ案内したら、サア運びよった運びよったな。そうこうする内に東がジイーと白んで来たら、コトツと一人も来んようになった。エエイ賊も我が身が怖いと見えて、夜が明けたら一人も来んわい。しかし金はんぼ程持っていんでくれた知らん、こない思うてな、金蔵へ入って調べたところが、あかんもんじやないか、千両箱がたった七十五しかへつたないのじゃが。賊も欲の無いものじやないかいな、ハハハハハ

○「エーッ、千両箱が七十五とは畏れ入りますな」

■「これも話のついで、丁度こっちへ来る十日程前の事や。女中どもが無精しよってな、

『旦那様、漬物の重しが丸うて持ちにくござります、何ぞ持ちよいもんふつと思いついて千両箱十放り出しといた。夕景になると一つずつ減るのじゃ。ハテ不思議なな、何で減るかしらん。減るはずや、出入りの者が出て来て、いにかけては一つずつ担げて帰りよるのじゃが、銭の無い者ちゆものは、浅ましい心になるもんじやないかいな、ハハ、ハハハハハ』

○「ウエッ、漬物の重しが千両箱とは畏れ入ります。アツ旦那様、そのおことばに付け込むのやござりませぬのやが、私の方もこんな小さな宿屋しております。宿屋だけで会計がたちませんで、この頃ではあちらの周旋、こちらの世話をさしていただいております。つきましては今度、エー高津へさして富が出来ましてな、マ富の札を売らしていただいておりますねが、日が明日になって一枚残ったんですね。なんと御無体が願えんもんでしようか。旦那様のような勢いのええ方じやったら当るじやろと思

ますでが。これでおます。番号がよろしい。エー、子の千三百六十五番。ええ番号ですが、なんと一つ御無体が」

■「アアそうか、でそら一体どないなるねん」

○「一番が千両で、二番が五百両、三番が三百両という籤がござりますねん」

■「フム、そうするとわしに一番が当たったところで、千両さえあげたら堪忍してもらえるのかえ」

○「ウツ何おっしゃる、いえ千両ちゆのは向うからくれますので」

■「アアくれるのか、ハハハハハハハ。わずか千両位の金、邪魔になつてどもならん。もうそらおこ」

○「旦那様ではわずかでござりましょが、我々千両ちゆいましたら、たいしたもんでおますが、何と一つ御無体が」

■「アアそうか、それで、そらなんぼあげたらええねん」

○「一分でおます」

■「一分。一分ちゆうや小ぢやな額が一つ、それでええのかえ」

○「へへ」

■「そんなんなら賽銭の残りが。オツとあつたあつた、それあげましょ」

○「この札を」

■「いやいや、もそんなもんいりやせん。仰山の中、当たりそうなことなし、当たったところで僅か千両位、ハハ、邪魔くさい。もうおこ」

○「でございませよけど」

■「そうか、ほんならマ、これもろうと鼻紙にできる。その代わりどれが当たっても、半分はお前様にあげるとしとこか」

○「半分ちゆいますと」

■「千両なら五百両、五百両なら二百五十両、三百両なら百五十両じゃ」

○「エッ、それを私にだけけます、こりや沢山に頂戴しまして」

■「頂戴しまして、まだ当たったないのじゃ、ハハハハハ。ちよつと一杯飲

みたい。熱燗にして一本。で別に何でもかまわん、二鉢程つけて、ウン急ぎ前でこしらえとくれ。ええか、はよしとくれや、ナアコレ……。アア下へ降りよったか。エエこりや迂闊に法螺吹けん。あんまり法螺吹いたんで、大事にしたった一分取られてしもた。ホホホ、明日から一文無しや。けどあんだけ言うたら、まんざら督促もしよるまい。ええ加減に食い倒して逃げてやろ」

——えらい無茶な。

△「巨様できました」

■「オオできた。イヤイヤかいて酌したり給仕してもらおうと気づつない。気根かいに飲むでな、フム用事があつたら手を鳴らすで、下へ降りていとくれや」

——それからゆっくり酒飲んで、とつくりとご膳食べて、ゴロツと横になりました。明くる日の朝、用がないのに早うから、

■「お早うさん」

△「オッお早うござります。えろう早うからお目覚めで」

■「主はどうしましたな」

△「昨日からちよつと出ております」

■「オオ出たか。わしも昨日主に話をしたが、二万両の口、これからちよつと行てこうと思う。いづれ帰るのは夕景じゃ。二階に何も無いけど、ちよいちよいと気を付けとくれや」

△「どうぞお早うお帰り」

■「はい」

——ポイと表へ出ましたが、カラケツで行くところがない。天満の天神さんへ行たり、城の馬場^{ばんば}へ行たり、道頓堀うろついたりして、ぶらぶらとやって来ましたが高津さん。何んし久し振りの富でござります。境内は一杯の人で、押し合い圧し合いしております。色々雑

多の商人が店を出しまして、正面の拜殿には檜の台があつて、三方が乗つて、富籤の箱がデーと乗つてござります。八つ位の男の子に、熨斗目の着付には金襴の袴を付けさしまして、錐の柄の長いを持って立つております。世話方は羽織袴でそこらウロウロウロウロ、ウロウロしておりますねが、

●「ナ、モシ、えらい人気ですな」

▽「サア久し振りで、えらい景気です」

●「ハハハハハ、しかし誰ぞ当たる人がおますねんな」

▽「この中の運のええ方に当たりますねん」

●「アア左様ですかいな」

▽「モシあなたも買うてなはるのんか、あなたも、モシあなたも買うてなはるのやろな」

●「へエ、よけやおまへんけどな、一枚だけ買うてまんねん」

▽「エツ、あんた一枚買うてなはるか。どんなんで」

●「もうし見とくなはれ、これです、ハハハ、番号がよろしい。辰の八百五十一番。これがわてに当たります」

▽「そんな事わかつてやすか」

●「ちゃんとわかつてまんねん」

▽「へエ、一番であつたか」

●「いいえ、一番当たりまへん。二番、五百両」

▽「そんな事わかつてあんのんかい」

●「へエ、昨夜、神様のお告げがあつたんで。」

『お前には非とも当ててやるよつてに、これあてにして待つてえ』

▽「ホンマであすかいな」

●「もうしコレ、富が当たつたら、あんた何をすると思いなはる」

▽「そうでんな、人の事でわかりまへん」

- 「けども人間には想像ちゅもんおますねん。あんた何をすると思いなはる」
- ▽「あんたの事ですよつてに、マア地所でも買うて家でも建てなはるのやろ」
- 「イエ、それが違います。十人寄りやあ十腹で、思う事も違うもんであんな。これ五百両当たりまっしやろ、直ぐにね、大丸へ走って行きましてな、浜縮緬一反買うてきます。京へさして紺に染にやります。染まってきたら、プツツと二つにして長い財布こしらえます、長い財布を。五百両こまこい物に替えてもろうてな、その中へほり込んでグルグルツと巻くちゆと、大けさはこの位おます。懐へ入れると、布袋さんのように腹がプーとふくれてます。新町にわたの女子が一人出てまんねん。年が天並二十二、丸ぼちゃで色の白い、髪の毛が濃いな、エツ、笑うとちよつとエクボの入るええ女子であ」
- ▽「もうし、のろけであつか」
- 「のろけやおまへんけど、聞きなはれいな、ハハハハ。いつもはシュと行って、シュと上るのに、久し振りで行くのに焦らしたりしますねん。こっちの方から手拭肩へかけて、わたい鼻唄もんであつせ。」
- △「赤襟……」
- ▽「なんちゆ声出しなはるねんな」
- 「～さんでは年季が長い、あだな年増にやあ間夫がある……」
- 『そばいよう、いよう』
- 『河内瓢箪山辻占屋でござい』
- ▽「何を言うてなはるねん」
- 「色町ずーっと流したりまんねん。門口へ行くなりな、～抱いて寝てさえ口舌が残る、ましてや格子の内と外……」
- と。わたの術妻、今晚あたりは来てくれるやろなて、張店で火鉢引き寄せて灰かきならして、火箸グサツと突っ込んで、でぼちんのせて思案らしい顔してる。表に声がしまひよがな、好きな男の声するときは蝶々の

- 簪抜けて出るちゆうねん。
- 『ちよつとおちよやん、いま表に来てやったん松ちゃんや違うのか。ちよつとおちよやん、表へ来てやったん松ちゃんや違うのかちゆうの。オオいや、また居眠ってるわ、この子。不景気な子、灯り見たら、じきに居眠るねんが。起すと寝とぼけて、頭ガシガシガシ掻いてる。手々で掻くねんあらへん、それがために簪が買ってあてごうてある。なんで簪で掻いてやないねん、手々で掻いてべべで拭きなはるし、いつも髪結さんの梳き子はんみたいに、そこら油だらけになってあるやないか。はよ表へ行きちゆのに、この子は何してるねえな。イエ早う表へ行きんかいな』
- 辛気くそなつてきて、自分が庭へパイと飛んで下りて、高下駄と草履とかたちんばに履いて、ガタコトガタコト、ガタコト……、へへ。
- 『松ちゃん、あんたどこへ行くねん。ちよつとどこへ行くねん』
- ▽「モシ、なにしなはんねん、人の袂ひつばつて」
- 「どこへ行くねえな」
- ▽「わて最前からここに立ってるがな」
- 「『何でうちの表、素通りすんの』」
- ▽「知らんがな、わたあんたとこの表。放しなはれ、けつたいな人やな」
- 「へへ、ちよつと話に身が入ったんで、あんたの袂貸ってん」
- ▽「何するねんな、この人、けつたいな人やな」
- 「ちよつと松ちゃん、どこへ行くねんな」
- 『どこへ行くねんて、いっぺん回って来んねん』
- 『回って来んねんあらへんやないか、久し振りで出て来たら、何でスーッと上つてやないの』
- 『上がつてやないて、わい今日銭無いがな』
- 『オオいや、またあんな根性の悪いこと言うわ。いつでも銭が無いがて

スーっと上んのに、今日に限って、そんな根性の悪いこと言はんかて、ええやないか。サアあんじようするよって、はよ上がりちゆのにはよ上がりんか、コレ上がりんかいな、上がりちゆのに」

▽「何でそないに、わたの横っ腹突きなはんねんな」

●「上がり上がり言われて、一階へトントントンと上がりまっしやるな、エツ、部屋をシューっと開けるちゅうと、水屋が置いて江戸火鉢があつて、大きな座蒲団が敷いてある。その上へわてがデンとへたつたりまんねん。

『マアマア松ちゃん、えらい久し振りやつた、どないしててやつたんや。おちよやん、ちよつとここへお出で。この簪持つて、おぼはん所へ行てあんじようしといで』

おちよぼが簪持つて飛んで出る。しばらくすると二両借つて来まんねん、よろしな。エ、ハハハハハ、その内から一朱だけ残しといて、

『これ帳場へ渡しとくれや』

残つた一朱紙に包んで、

『サア、これ松ちゃんに礼言いまんねんで』

へへエ、

『これ松ちゃんに礼言いまんねんで』

あんた、どう聞いている。自分の簪ころした錢をば、松ちゃんに礼言やちゆねが、何と有難いことばやないか。いっぺんこつちや向きなはれ、どこ向いてねんな」

▽「もうし何するねん、人の耳引つぱって」

●「へへ、あんた余所見してる」

▽「なんぼ余所見したかて、耳引つぱる人がおますかいな」

●「松ちゃん、どないしててやつたんや」

『酒五十本ほど爛して、茶碗蒸し百ほど言うてきて』

『オオいや、茶碗蒸し百も何するねん』

『何する、茶碗蒸しで行水ができるか。食べるのに決まってる』

『食べるのんわかつてあるけど、百も食べられへんやないか』

『ええがな、食べられへんだら、朋輩に食べてもらいんかいな』

『朋輩かて、そない仰山いてへん』

『そんなら近所へ配つといで。茶碗蒸しの施行やがな』

『マア松ちゃん、そんなあんた手荒いこと言うて、どうするねん。今晚夜が更けたあるによつてにな、何にも食べんと寝んねしなはれ、ええか。何にも食べんと寝んねしなはれ』

『ホホウ、そうすると何かいな、わしに食わすのん惜しいのんかい。イヤわしに食わすのん惜しいのんかい。わしの口をば飢じめるな』

▽「何ちゆ顔しなはる」

●「わてが怒つたるとな、

『アッアッア』

▽「アアまた泣いている。一人で怒つたり泣いたりしてまっせ、この人」

●「何を言うねんな松ちゃんいま。店の仕切でさえ、簪ころしてこしらえたんやないか。それにあんた、お酒の五十本に茶碗蒸しの百なんて、どないして出来るいな』

『ハハーン、金が無いので泣くのやな。金が無いので泣くのか。ハン、これで買うてこい』

この財布、ポイとほりだしたりますとな、ちよこちよこつと走つて行って、拾おとすると金やによつて、

『オオイヤ松ちゃん、あんたたんとお金持つてなはんねんな。わかった、この間住友はんへ賊が入つたつてのん、あんた賊の片割れやないか』

『賊の片割れ。アホ言え、高津の富が当たつたんやないかい』

『マア嬉しいこと。あんたどうする積りや』

『どうのこうのあるかい、親方呼んで証文持つといで』

一文も値切らんと身請けして、家一軒建てて、女子衆の二人も置いて、朝風呂丹前。へへエ、朝起きたら、楊枝くわえて手拭肩へかけて、風呂へ行きまんねん。帰って来るとお酒がつかって、ご馳走がならんである。差し向かいで一杯飲みまんねん。酔うた時分になると、

『オイ寝よか』

ゴロつと寝まっしやるな。目あくど楊枝くわえて風呂へ行く。帰って来るとお酒がつかって、ご馳走が並んでるわ。ゴロツと寝たわ、目あいたら楊枝くわえて風呂へ」

▽「あんた風呂へ入って一杯飲んで寝てばかりいなはんねん。そら富が当たってからであっせ」

●「さようさよう」

▽「当たらなんだら、どうしなはんねん」

●「当たらなんだら、もう焼き芋食うて寝る」

▽「何を言うてなはるねん」

——ワアワア言うてる間に時刻が出てきました。世話方がそれへ出てまいります、富鐵の箱を取ってガランガランと振ります。中を改めといて、ガランと振ります。子供が錐をばブスつと付き込みます。突き刺したなり向うへ突き出すと、世話方がその札取って、

◇「第一番の御富」

——と声がかかると、今まで喧しい言うてた人が水まいたように、シーンとしてしまいます。

◇「子の千三百六十五番」

◎「オイ」

「あんた、へちやばんはったな」

◎「ハハハハハ、スレたんじゃ」

「スレた。わずかのスレやったら、金くれます。なんぼスレたんであす」

◎「たった八百五十」

「仰山スレてますがな」

——またぞろガラガラーンと振ります。トーンと突き刺して、向うへ出す。

◇「第二番の御富」

——と声がかかると、今までのろけ言うてた人、

●「どいて、わたの番や。へへーん、サア風呂はいつて一杯飲んで寝るか、焼き芋で辛抱するかの境目になってあるねん。サアやってくれ、ホラ」

◇「辰の……」

●「どんなもんじゃい、コラ」

◇「八百……」

●「おいでたな、五十か」

◇「五十……」

「もうし、とうどあの人、祈りだしましたで」

●「一番やろ」

◇「七番」

●「ワイ」

「またへちやばった、この人」

——三番も突ききりまして、大きい紙に当たりを書いて張りだしますと、皆がドヤドヤと潮の引いたごとく。カラケツの親仁さん、ブラブラとやつて来た。

■「ホウホウ、えろう人が……。アア昨日主が話をした富じゃな。もうし、富はどうなりましたえ」

「今すみました」

■「すみましたか。当たりは」

「向うに紙に書いて張っておま」

■「ホホウ、立派に書きよったな。なるほど一番が子で、二番が辰で、三番が

寅。千支頭と竜虎。威勢のええもんが出てるな。一番が子の千三百六十五番。二番が辰の八百五十七番。三番が寅の五百四十八。ワアーええ番号や、ちがいない。わしも買うたんがあるねんで、これ。ハハハハ、わしの買うたんが子の千三百六十五番と、一番が子の千三百六十五番。エツ、当たらんもんやなあ、なるほど。エー二番が辰と、わしのんが子。子の千三百六十五番か。わしのんが子の千三百六十五番。ハハーン、ちよつとの違いやで。エヘン、子の千三百六十五番に子の千三百六十……ゴゴ五番や、これ。あれが子の千三百六十五番に、わしのんが子の千三百六十五番。子と子と、千と千と、三と三と、百と百と、六と六と、十と十と、五と五と、番と番と。オホホホホ

「どうしなはってんな」

■「ハハハ、アタタタタ……」

「なに」

■「アタタタタ……」

「当たった。当たったら、いんで待ってなはれ。世話方がすぐに金持って行く」

■「アタタタタ。アタタ」

「なんでこんなに震うねんな」

■「アタタタタ……」

——あわてて宿屋へ帰って来て、頭から布団かぶって寝てしもうた。宿屋の主人も、きまりませんからやつて来まするちゅうと、もうすんだ後で、

○「ホホウ、えろう早う片付いたな。ホホウなるほど、一番が子で、二番が辰。違くない、わしも旦那様から買うてもろうた控が取ってあんねんで。

どれが当たっても半分……、子の千三百六十……。アタタタタ」

「またこんな人が出来たで」

○「どれが当たっても半分やるて、半分もろたら五百両。五百両もろたら大坂中の地所をかうて……。それはええけど、手がひっついて取れんが、手がひっついて。これを取ってもらうために、五百両かかったら、ほいたら何にもならへん。元々になつてしまふねんがな」
(後囃子)

Report on Nitto Long Play Records in the Collection of the National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo

IJIMA Mitsuru

Recording time of 10 inch short play records (78rpm) that widely popular before World War II was approximately 3 minutes per side. For this reason, various ways were developed to enable continuous recording for pieces that were longer than 3 minutes.

In the latter half of the 1910s Nitto, a record company in Osaka, developed a long play record that enabled recording for a little over 10 minutes per side. This was an epoch-making invention. However, while the recording system employed for ordinary records was constant angular velocity, the one for Nitto long play records was constant linear velocity. For this reason, a special player was necessary and Nitto long play record was not so popular. Now, it is extremely difficult to obtain proper sound of Nitto long play record whose manufacture was terminated several years after its development.

The Department of Intangible Cultural Heritage of the National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo has a collection of 16 Nitto long play records. An open lecture entitled “Record of Kamigata Rakugo of the Early Showa Period” (Main Hall of Heisei-kan, Tokyo National Museum, October 5, 2013) was held on the topic of this record. In the present report, Nitto long play records in the Institute’s collection are introduced with focus on the one used in the open lecture.